

WONDER PLANET HASHIGUCHI
惑星ハシグチ
 2009/FEB. VOL. 06

世界が一気にソフトした昨今ですが、それでも惑星ハシグチ、今年もどうぞ宜しくお願い申し上げます。

惑星ハシグチ 2008-2009

EVENT 12月

- 7日…締打ち (地元稲荷神社) 朝8時〜。私出席。
- 11日…御神祭り (地元稲荷神社) 朝8時半〜午後5時私出席。
- 25日…中山間地会合夜7時〜
1月 母出席。
- 11日…初会 (地域の年一度の総会。役員や一年の行事等を決める) 私出席。
- 22日…新年神行 (自宅) 朝10時〜
 春日神社神主による一年の家内安全神事。母私対応。
- 24日…八天講 惑星ハシグチ最南部の聖域にある八天宮祭
 「神迦具土 (かぐつち) の命」 (吉井町郷土誌より) の神事。自由参加。

27日…営農組合会 (橋川地公民館) 夜7時〜母出席。
 29日…吉井町エコツーリズム研究会 (吉井町ひまわり館) 午後2時〜。私出席。

PICK UP 一皮剥けて宇宙を覗く——注連縄作り

惑星ハシグチ、師走になるとまた俄に行事が多くなる。まず7日の締打ち。(注連打ち) これは、惑星ハシグチに点在するの四つの聖域「稲荷神社、本神社、田中神社(通称源兵様)、八天宮神社」の入口に掲げる注連(しめ)縄を住民総出で新しく作る日である。注連縄はその年穫れたお米の藁、藁は「宿」(やど)というその年の廻り番の二件の人(人)が用意しなくてはいけない。今年の宿、うち一件は、私の家だ。

そもそも、惑星ハシグチの主な伝統的地域行事は住民が全て農民だった頃の生活に基づいている。現在田圃を減反等で休耕田にしている家もその廻り番か来ると、自宅で作っていかなくても御近所等作っている所から藁を調達して来なければならぬ。私の家も田圃は殆ど近所の方に貸し作って頂いているのでその方から藁を調達する。大小四つの注連縄を作るのに直径10cm長さ1mの藁束が約三十束位必要。そして当日までに大きい熊手のような農具で藁を鋤き中途半端な藁などを省いておく。事前の仕込みが必須なのである。

惑星ハシグチは全部で十七戸、一人ずつ出席し全員当日早朝、近くの稲荷神社境内に集まる。まず男衆で、藁束を敷石の上で回しながら、「カケヤ」という木槌で叩き藁を柔らかく加工しやすいうように髹(なめ)すことから始める。注連縄には大きく二つの作業が必要だ。一つは勿論、縄を綯(な)うこと。もうひとつは、「人形」と呼ばれるものを作る。藁束を束ねて普通思ってしまうがそうではない。注連縄は皆さん御存知のように途中から縄が太くなっている。その縄を太くしていく為に、糾(あざな)いながら入れ混ぜていく小さな藁束のことだ。縄を沢山作る。初参加の私も、長老たちに教えを乞う。約十数本の藁を取り、その根元の方の尖端を微妙に斜めにずらす。うち一本の藁でその尖端部をくるくると束にするのだ。先を尖らせるのは、藁に入れ込みやすくする為。かなり沢山作る。その間にベテランの長老たちは注連縄四本のうち短い二本をそれぞれほぼ一人で綯い作り上げてしまう。

残りの大きな注連縄は一本を三人で作る。「はい、これ持って！」と持って持たされたのは大きな藁束二本のうちの一本。藁束の根元は、秋の『お宮日』で一緒に参加したF君が持つ。

この綯い方は、文字だけでは説明しづらいのだが、最初藁束本の根元側をそれぞれ両手に持ち、その尖端の藁の長さを各々斜めにずらし、それを互いにかませ合う。このとき両手は小指側が互いにくっついている形。さてこれからは中々難しい。その

気づく私はYさんとこの大きな縄を綯うことになったのだ。Yさん促されまま藁束を振りあげつつ、同様にしたYさんの藁と、一回一回気合いを入れて、左周りに素早く交換していく。Yさんは大柄で力もある方、難なく捌かれるが、初めての私は動作が遅れ気味。二人の息が合わない綺麗な縄になっただけか。また、縄を次第に太くするため途中で、「人形」を藁に入れ込みつつ糾う。太くなる縄は、振りあげるにもかなりの力がある。都市生活ではまずあまり経験しない作業だ。初めてということでも力んでいたのか気がつくといふは手の皮が剥けて血が出て来てしまった。かといつて手を休めるわけにはいかない。「こりゃいかんばい。縁起物やけんね」。互いに縄を交換しながら

の作業、血が付いた縄に気づいたYさんが、(つたくしよーがねえな)という感じで、言い放った。見かねたF君が私と変わって来て何とか作業は終了した。手の皮が剥けるとは思ってもみなかった。確かに情けない。都市生活が如何にかようなことから遠いか、文字どおり痛感し、一皮剥けた一日だった。

注連縄と蛇

注連縄は御存知のように古代日本の蛇信仰、交合する二匹を象つたもので、生命力や豊穡のシンボルとされている。脱皮するところも再生の意を見出し得るようだ。蛇や龍の伝説や信仰対象が日本中あまねくあるのも御承知のとおり。そもそも日本列島そのものが龍体という説もあるくらいだ。しぜん根付いてるため、それがどうしたの?と言う感じかもしれないが、一体何故、蛇であり龍なのだろうか。

これらに疑問を持ち色々調べると、大抵、何時の間にか壮大な宇宙の歴史と驚きの人類創世の話に辿り着く。真実か否かはともかく、多くの研究関連本があるのは事実。興味と時間のある方は存分に…。

神は二つの渦をあわせもつ

個人的には二匹の蛇と螺旋の構造に注目したい。これは直感的に西洋の自然神秘主義と錬金術の学問、へ

ルメス学で比較的よく見かける図像、「ヘルメスの杖」に絡まる二匹の蛇を想起させる。或いは古代地中海世界の医学の神、アスクレピオスのシンボルとも、酷似である。また、インドヨーガの体系にいては、からだの脊髄に「ブラフマンの杖」には、覚醒すると、クンダリーニ(二匹の蛇の火)交差しつつ螺旋状に背中を駆け上がるという。

さらには、アジアや日本のカタチに詳しい杉浦康平氏の注連縄観も参考にして、手元にある資料をみていたら、自分でいうのもナンですが、瞠目すべき発見をした。

それは、「神」という字についての考察のくだりだ。その傍(つくり)「申」について、この「申」という字の古形は、なんと!左巻きと右巻き二つの渦を結ぶかたち由来しているそうだ。(『かたち誕生』中野人間大学テキストより)杉浦氏はこれを稲妻の光に由来、とおっしゃられているが…。

私はこれは、「ヘルメスの杖」「アスクレピオスの象徴」「クンダリーニ」と相似形、いやそのものではないか?と密かに思っている。

そして、もちろん二重螺旋構造と言え、そう、私や貴方、全生命体のDNAです。(使用文書ソフトの都合でそれぞれの図像をお見せ出来ないのがトモ残念!)

これらに共通する対の螺旋構造とは何なのか?

誤解を恐れず、言い切ってしまうと、これらは、例えば、意識物理学者、半田広宣氏がその著作『人類が神を見る日』(徳間書店)で唱えている、「宇宙の創造原理の鑄型(テンプルト)のようなもの」タカヒマラ(同書68頁)の、この世的な現れだと私は思う。勿論同書にも二つの螺旋構造が紹介されている(69頁)(氏の考えでは厳密に言えば二つではなく双対の構造なのだが)福岡在住の氏とは、御縁があったのか、90年代から、氏が提唱する意識と物質を統合する理論、ヌースセオリ(現ヌーソロジー)を学ぶ機会を得られた。その斬新な宇宙論は、私の中では、難解さと驚く程の整合性が胸交ぜになっており、消化不良のところもあるのだが、自分の世界認識に少なからず影響を与えている。素粒子から銀河系に至るまで、私達の世界はこの回転する渦に無縁なものひとつとないはずだ。それが漢字の「神」という字の中にも組み込まれているとするなら…。

これは偶然にしてはチョット出来過ぎではないだろうか?注連縄から、気づくとトンデモない話になった。「…こんなことア、どうでもヨカケンカ、とりあえず、来年は血なんか出さずチャンと纏うよーに!」地域の方々からはそう言われてる気がしないでもない。来年はリバテープを貼って臨もう。

その他のイベント

毎年十二月十一日に、すぐ近くの稲荷神社で行われるという、御神祭りも大変興味深い儀式を様々な伝統的段取りに乗とって進む。稲荷神社以外の惑星ハシグチ、三つの聖域に新しい注連縄を掲げ神事が行われるのだが、この供物や神事が事細かく、決まっている。何故どういう流れでそのようになったのか。また、その後、神社に戻って神主たちより奉納される平戸神楽は置二置程の空間で実に多彩な舞踏が繰り広げられる。高千穂神楽(九州では有名)程の絢爛さはないにせよ、惑星ハシグチ住民だけで体験するには、勿体無い位だ。これらについては、また機会を改めて紹介したいと思う。

吉井町エコツーリズム研究会(1月29日)、これまた実に不思議な経緯で参加することになった。とにかく未だ出来たてはやはやの会。どう関わっていくのか?こちら、今後御報告出来たらと思つてマス。

FROM EDITOR

●今回も発行直前にPCが壊れ、今度のもうダメだと発行を諦めてしまいましたが、また信じた復活をいたしました。●『惑星ハシグチ』も次号では一年おりの陰謀で感想をお願いします。次回1周年記念号にて御迷惑なら思お待申しします。感謝です!次回1周年記念号にて御迷惑なら思お待申しします。●インターネットも現在鋭意準備中!

「セチバル話は世知原話 しか? (その一)」

※編註：世知原（せちばる）とは、惑星ハシグチの東側隣接町名。

中川正生

昭和十八年に三省堂から出版された柳田国男編『全国昔話記録』壱岐島昔話集（山口麻太郎）は、いわゆる日本の昔話を全国規模で収集したものである。わたしはたまたま本郷の古書店でそのなかの「壱岐島昔話集」を見つけ、バラバラめくっていたところとても興味深いことを見つけた。それは原文に付いている註を呼んでもらったほうが、手取り早いだろう。

註：「一般には馬鹿息子の話又は馬鹿婿の話などと呼んで居るが、一部に此種おそか者話の一群をセチバル話と呼んで居る。北松浦郡の世知原村と関係があるのか何うか分らないが、文字は仮に世知原と記すことにする。」

これによれば、馬鹿息子の話の類いを一部では「セチバル・バナシ」とよ呼んで居るということである。民話だから当然ながら文字化されてはいないので、このセチバルがはたして「世知原」であるかどうかは疑問である。まず、この点を明らかにできないものだろうか。しかし、その前に一部でセチバル・バナシと呼ば

れているとあるが、それは事実かどうかとも確認する必要がある。そしてさらに、どうして馬鹿息子の話がセチバル・バナシと呼ばれるようになったのかにも興味がある。世知原には昔から馬鹿息子が多かったのか。あるいは、世知原人は頓智に優れていてこのような話をたくさんつくり出したのだろうか。これらの疑問を明らかにするには、いろいろな方法が考えられるだろう。まずそのところから始めてみるつもりである。さらにこの民話は壱岐で採取されたわけだが、わが家の祖先は壱岐から元和年間（一六一五～二四）頃に橋口に移入したと伝えている。直接の関係はないかもしれないが、案外昔は壱岐なども行き来があったのかもしれない。折りをみて、現在の世知原に残っている民話を集め、それと比較対象することから始めるのがいいのではなからうか。ともかく、まず、その馬鹿息子の話しを読んでもらおう。

一、猪殺しから風呂炊きまで

昔、或処に婆さんと其子の馬鹿息子とが居つた。或日婆さんが、隣の猪の御馳走になつて来て、大変うまかつたと話した。馬鹿息子がそれを聞いて、猪は何処に居るのかと尋ねた。朝早く浜を歩いて居ると出て来るさうだと婆さんは教えた。馬鹿息子は翌朝早く起きて浜辺を歩き廻つて居ると隣の婆さんがおしほい（お

汐い）を汲んで居るのを見つけた。馬鹿息子はあれが猪と云うものだろうと思つて、静かに近づき、いきなり婆さんをたたき殺した。そしてその屍を負つて帰り、猪をとつて来たから食わしてくれと婆さんに頼んだ。婆さんがそれを見ると隣の婆さんである。これはとんでもない事をしてくれたと怒つたけれど共もう何もする事も出来ない。仕方が無い、葬式をして上げよう。お前は坊さんを頼んで来てくれと云つた。馬鹿息子は「坊様アどげにしちよらすとナア」と尋ねた。「坊様ア黒か着物着ち座つちよらす」と教えた。

馬鹿息子は教えられた道をやって来ると、寝ている黒牛を見つけた。坊さんとはこれの事だろうと思つて、「隣の婆さんヌ無うならしたけに、来ちおくれまつせエ」と云つた。牛は「もうもう」と鳴いた。

「もうちやありまつせん、のうちイです」と馬鹿息子は云つた。それでも牛はもうもうと云つた。馬鹿息子は帰つてその事を話した。「それア牛ちやろうが、まーペン行たちけエ」と婆さんは云つた。馬鹿息子はこんどは鳥を見て、是が坊さんだろうと思ひ、「隣の婆さんが死なれましたに、葬式イ来ちおくれまつせエ」と云つた。鳥は「かーう、かーう」と云つた。馬鹿息子はぶんぶん怒つて帰つてきた。そしてその事を婆さんに話した。婆さんは「それをア鳥たーえ。よかよか俺が行たち来るけに。をしア飯ば焚き居れ」と

云つて出て行つた。馬鹿息子は飯をたいて居ると、「くたくたくた」と飯が煮え立った。「出来ムせんうちからくたくた云う」と云つて、馬鹿息子は怒り出した。それでも飯「くたくたくた」と云うので、庭に放り出した。釜は「くわーん」と云つて割れた。「今エなつちかろくわーんちうたち出来るもんか」とどなった。間も無く和尚様来られたが、飯は無い。づしから酒でも下して御馳走しよう、今度は婆さんが、づしに上つて行つた。「さア酒ン甕おろすけに、をしア尻はしつかり持ちちよけ」と婆さんが云つた。「よーし」と馬鹿息子も一生懸命である。「ゆるかすぞ」と云つて婆さんは手を放した。甕は土間に落ちて割れた。酒は流れ出てしまつた。婆さんは下りてきて怒つた。「いんげ尻ばこげエにもつちよたつ」と、馬鹿息子は自分の尻をはぐつて見せた。ほんとに尻は爪のかたがついて赤くなつて居た。葬式もすんで和尚様に風呂を上げる事になつた。和尚様は湯が少しぬるかつたので、今少し焚いてくれと云つた。馬鹿息子は一生懸命焚いた。和尚様はよい心持ちで風呂から上つて着物を着ようとして見ると、着物も帯びも無い。馬鹿息子に聞いて見ると、「和尚様が何もかも焚けちち云はつしやたけに火にくべました」と答えた。和尚様は仕方なく裸のまま、石路の葉を禪がはりにして帰られた。（初山村、有浦ジュン氏其の他）（その一了）。